

第62回日本小児保健協会学術集会 教育講演

共生の哲学と実践—長崎で考える

高橋 眞 司 (長崎大学産学官連携戦略本部人材育成部門生涯教育室客員教授)

I. はじめに

「共生の哲学と実践」というタイトルのもとに、私は、まず「共生の語源」について語る。次いで現代日本と現代世界における共生の具体的事例について述べて、そこから「共生の哲学」の基本となる四項目を導き出し、それを一つの図形「菱形」に配置する。そして、その間に「間奏曲」と称して、私たち家族のささやかな実践についても触れてみたい。

II. 共生の語源

「共生」は英語で、“symbiosis”と綴る。ドイツ語(die Symbiose)もフランス語(la symbiose)も同様の綴りである。「共生」という言葉は、今日では生態学の学術用語として定着している。その意味するところは、「種を異にする二つの生物が互いに利益を受ける仕方で、共に生きる関係」を言う。そして「共生」から驚くべき進化が結果することもある。例えば、最先端の研究によれば、クラゲとウズベンモウソウ(渦鞭毛藻、植物プランクトン)の共生から、光センサーの遺伝子であるロドプシン遺伝子がクラゲの体内に作られて、クラゲが光を感じるようになり、それが長い進化の過程で脊椎動物、そして人類が眼を獲得する端緒となった、というのである¹⁾。

ところで、「共生」が日本語として、例えば、障害者団体が「共育共生」という使い方をするようになったのは比較的新しいことであって、1970年代の半ばのことであった²⁾。

さて、この「共生(symbiosis)」の語源は、ギリシ

ア語の“σύμβιωσις”である。それは、“σύν”(共に)と“βίωσις”(生きる)、あるいは“βίος”(生命、生活、生きること)の合成語である。上に述べた英語ほかの言葉は、ギリシア語の“σύμβιωσις”をそのままローマ字(ラテン文字)表記したものである。

ところで、哲学者のソクラテスやプラトン、アリストテレスが生きた古典ギリシア時代には、夫には“ἄνδρας”, 妻には“γυναίκα”という立派な呼び方があったが、夫婦ともに「共生者(σύνβιος)」と呼ばれてもいた。

二人の人間が夫と妻として共生する。その愛の営みの中から新しい生命が誕生する。さらにその生命が成長して、新しい「共生者」を見つけて生活を共にし、新たな生命を育む。ということは、人々の共生から人類の「いのちの樹」の樹形図(tree diagram)が描かれることになる。

こうして、「共生(symbiosis)」の語源の考察から一つの命題を容易に導き出すことができる。すなわち、共生の営みの基本は「愛とケア(Love and Care)」であるということである。なぜなら、愛とケアなくしては人類の「いのちの樹」の樹形図を描くことは不可能だからである。

この場合、ケアはすでに日本語になっていると言ってもよく、世話するだけでなく、心配する、配慮する、看護する、年老いた親をみる場合には、死を看取る、などの意味をあわせ持つ。

このように述べてくれば、私たちの脳裏におのずから一つの格言“Charity begins at home”(愛は家庭か

ら始まる)が思い浮かぶ。これは、マザー・テレサが好んで使った格言である。私は家庭の大切さを強調する文脈で、家庭生活は人々を「共生」に向かって育てる苗床、あるいは揺りかごである、と言ってみたい。

一つだけ事例を挙げよう。長崎のカトリック、また医師として名高い永井 隆(1908~1951)は、自伝的小説『亡びぬものを』(1948, 1949年)の中で、子ども時代の思い出として、母ツネが台所の勝手口で貧しい人に食べ物や着る物を施しているところを書き留めている。子どもたち(次世代の共生者たち)は、家庭生活の中で共生に向かって養われてゆくことを私は強調しておきたい。

Ⅲ. 共生の実践(その1)

「共生の哲学」を考える手がかりに、現代日本における共生の実践例として神谷美恵子と大江健三郎を取り上げる。

1. 神谷美恵子(かみや みえこ, 1914~1979)

神谷美恵子は、1933年、十九歳の時、叔父の金澤常雄の講演にオルガン奏者としてハンセン病療養所「多摩全生園」に行き、ハンセン病患者に初めて接触した。「らい病」について何も知らなかった美恵子は患者の姿に「大きなショック」を受ける。そうして、その十年後に一編の詩「癩者に 1943・夏」³⁾を書き留めた。そこには、

何故私たちでなくてあなたが?
あなたは代って下さったのだ、
代って人としてあらゆるものを奪われ、
地獄の責苦を悩みぬいて下さったのだ。
許して下さい、癩者よ。

といった詩句が認められる。ここで私は、神谷美恵子について何事かを述べることをさし控えて、むしろ、美恵子書き留めたあの詩句は「ケアへのまなざし」⁴⁾とどうかかわるのか、という「問い」を提出しておきたい。

(なお、「らい病」の語は、みずす書房と同様に、神谷美恵子がこの語を「差別を助長する意図で使用していない」ことに鑑み、当時のままとする。)

2. 大江健三郎(1935~)

大江健三郎・ゆかり夫妻の長男は生まれた時、脳へ

ルニアで「頭が二つ」あるように見えた。一つを切り落とさなければ生き延びることはできない。切り落とせば脳に欠損が生じ、重い障害が発生する虞がある。「光」という命名自体に、光さんが目が見えるように、「光あれ!」(『創世記』1:3)という神の世界創造の端緒における「命令」にも似た、熱い願いが籠められていたのである。

大江は重度の障害を背負った子どもを引き受けるかどうか思い悩んでいる時に、広島に行き、被爆者に出会い、被爆者のうちに「それでもなお自殺しない、威厳ある人々」を見出した。そして、「二十世紀の悲惨」を正面から引き受け、それを担い続けた重藤文夫・広島原爆病院長のような人と出会うことを通じて共生への「根本的な励まし」を受けた。

大江健三郎の文学について、私は次のように言ってみよう。大江健三郎は、重篤な障害児との共生を引き受けることによって、そのことを通じて、大江文学はより深い人間性(humanité)とユーモア(humor)と威厳(dignité)を湛えて、ノーベル文学賞の受賞につながった、と。ただし、ノーベル財団の発表した授賞理由はごく短いもので、光さん、あるいは被爆者との共生には触れていない。

『間奏曲』長崎に生きる一私たちの「共生の実践」

「間奏曲」として私たち夫婦が、家庭を開いて、家族と共に「共生」について実行してきたことを三つ紹介してみたい。

(1)「ユニセフ長崎」の活動

私の「共生者」、妻・靖子は「社会福祉学」を専攻した。1980年代のはじめ、アフリカに大旱魃が発生した。緊急の支援を呼びかけるポスターに、アフリカの飢えた子どもたちの写真があった。その子どもたちの訴えるような「まなざし」に、彼女はわが家の三人の子どもの瞳を重ねると居ても立っても居られず、1984年夏の盛りに街頭募金を始めた。以後、生徒と学生、教会員、知人と友人のボランティア参加者も徐々に増えていった。やがて定着していった「ユニセフ長崎」の活動は、世界の子どもたちが今どのような状況にあるかを知るために、毎年「ユニセフ」が発行する『世界子供白書』(The State of the World's Children)を読む「つどい」(学習会)と街頭募金の二本立てであった。この間、街頭で募金に進んで快く応じてくれた被爆地・長崎市民の優しさ

を直接肌で感じる事ができた。

(2) ホームレス支援活動

私の「共生者」は、自宅二階にバス・トイレ付きの「マリア・須藤ホーム」を増築した。須藤という名前が入っているのは、1983年、横浜の山下公園で中学生を含む十人の少年たちに「ゴミ箱に入れてなぶり殺し」にされた須藤泰造さんの出来事⁵⁾を銘記するためであった。これまで「画伯」、ヒデさん、Dさん、Tさん、その他の人々をお世話した。いずれも十年単位、二十年単位のつきあいであった。ホームレスの人たちは長い助走期間があって初めてわが家を訪問してくれる。『邦訳 日葡辞書』⁶⁾には、モンスーン地帯にある日本の風土に適った独特の「おもてなし」として、「風呂」の項目に「風呂上がりの振舞」という言葉が採収されている。私たちはホームレスの人々を自宅に招き、お風呂に入っていたき、くつろいだ会話と食事を共にし、一晩の安眠を提供して翌朝、また街中のいつもの居場所に帰っていただく。

北九州市の奥田知志氏はホームレスを「原樸」と呼び、そのための支援施設を「抱樸館」と呼ぶ。「原樸」とは荒木のことで、山林から伐り出したばかりの荒々しさや刺々しさを持つが、磨けば無限の可能性を秘めたものという意味が込められている。私たちが家庭を開放し、心を開いてつきあってきたホームレスの一人ひとりを思う時、奥田氏の「原樸」という言葉に心から共感を覚えるのである。

(3) 水曜日ごはん

これもわが愛する「共生者」の発案で、週に一度、世界の飢えた人々のことを覚えて、水曜日の夕食は、ごはんのみそ汁、あとは梅干しだけで、デザートはなし、という質素なものにとどめる。反抗期に入っていた長男は「自分たちは成長期にいるのだから…」と言って反抗を試みたが、世界には一日一回の食事のままならぬ子どもたちがいることを告げて、家族で「水曜日ごはん」を継続した。こうして浮いたおかず代は、福祉活動に、あるいは「ユニセフ」や「国境なき医師団」(MSF)の募金活動にまわす、などしてきた。

これら三つの活動は1980年代から今日まで続けている。ただし、2011年春、東日本大震災、フクシマ原発事故のあった3・11後、海外から物心両面にわたる支援が寄せられている事態を考慮して、街頭募金を停止した。「ユニセフ長崎」も会員の高齢化(お二人が90歳代の半ばに達した)に鑑みて、会そのものの解散と

いう苦渋の決断をした。

IV. 現代における共生の実践(その2)

現代世界における「共生」の実践例として、というより共生の範例(paradigm)として、これまで私が学んできたもののうちからガンジー、キング牧師、マザー・テレサ、ネルソン・マンデラの四人を取りあげてみたい。

ただし、以下では、「共生の哲学」四項目を菱形に配置するために必要最小限の言及にとどめる。

1. ガンジー(M. K. Gandhi, 1869~1948)

ガンジーのキーワードは2つある。「真理把持」(Satyagraha)と「非暴力」(Ahimsa)の2つである。ガンジーは言う。「わたしの道ははっきりしている。真理の外交以外にそれを知らない。また非暴力以外に武器をもたない」(1924年)

ガンジーは原子爆弾の暴力に対しても非暴力を訴える。「人類は非暴力(Ahimsa)によってのみ暴力から脱出しなければならない。憎悪は愛によってのみ克服することができる」これは原爆投下の翌年(1946年)の言葉である。

2. キング牧師(Martin Luther King, Jr. 1929~1968)

黒人に対する人種差別(segregation)に対抗して異議申立てを行った黒人指導者の一人、マルコム Xはいわば武闘派で、機関銃で武装して機関銃で殺された。それに対してキング牧師は、ガンジーに深く傾倒して、「汝の敵を愛せよ」を実践した。そして「汝の敵を愛せよという命令はユートピア的夢想家の達成しがたい命令でなくて、われわれが生存するための必要不可欠なもの(absolute necessity)である」と言っている。

3. マザー・テレサ(Mother Teresa, 1910~1997)

「ロレット女子修道会」のマザー・テレサが、インドのカルカッタで、貧しい人々、死にゆく人々、そして孤児に奉仕するために作ったカトリックの修道女会の名称は「神の愛の宣教者会」(Missionaries of Charity, 1950~)という。彼女は「大事なことは、私たちがいかに多くのことを成し遂げたかではありません。大事なのは私たちが行っていることにどれだけ多くの愛を注いでいるかなのです」と言っている。

妻と娘がカルカッタのマザー・テレサの本部組織にボランティアとして奉仕活動に行って、そのお土産として私にくれた小さなカードには、祈るマザーの姿と、その下に小さく「痛むまでに与えなさい—ほゝえみつ」(Give until it hurts — with a smile) とある。

マザー・テレサは書いている。『『神の愛の宣教者会』は、貧しい人々に手を差し伸べる度に、キリストに手を差し伸べているのだと信じています。私たちはこれを喜びをもって (with joy) 行います。なぜなら、キリストのもとへは、たとえ貧しい人の姿であったとしても、不機嫌な顔をして行くことはできないからです」。

4. ネルソン・マンデラ (Nelson Mandela, 1918~2013)

南アフリカ共和国の人種隔離政策 (Apartheid) 下で、そこにあったのは、支配と服従、富裕と極貧、清潔と汚穢などなど、白人社会と黒人居住区の鋭い対比であった。反アパルトヘイト闘争の指導者、弁護士ネルソン・マンデラは1964~1990年まで、足かけ27年間の長きにわたって投獄された。だが、反アパルトヘイト闘争は、黒人が白人を支配するのが目標ではない。マンデラは白人支配の旧体制を黒人支配の新体制にひっくり返すことを望んだのではなかった。マンデラは言う。「真実和解委員会における証言の目的は、和解のためであって、決して復讐のためでない」と。彼が望んだのは「真実」を明らかにして、両者が真の「和解」を遂げること、「和解」の上に新しい国を作ることであった。全人種が共同で、国民となり市民となる社会を求めた。

V. 「共生の哲学」(四項目) — 菱形に配置された

さて、現代日本と現代世界における共生のさまざまな実践上の範例を一瞥した今、「共生の哲学」をどのように図示できるであろうか。

私は一つの試みとして、四つの重要な概念を選び出し、それらをダイヤモンドの切片の菱形 (lozenge) に配置した (図1)。まず、菱形の頂点 a に「希望」を置き、a から下に伸ばした垂直線の末端 b には「愛」を据えた。そして水平線 c に「非暴力」を置き、d には「ほゝえみ」と書いた。

図1「共生の哲学—菱形図」は、現代世界における帝国主義的支配からの国家と人民の解放、人種差別と人種隔離制度、そして貧富の格差と抑圧、放置、遺棄

共生の哲学 (四項目) — ひとの身体と機能をそえて

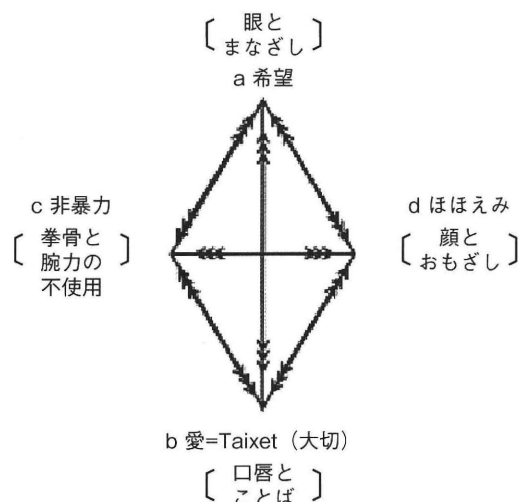


図1 共生の哲学—菱形図

などに抗して闘った現代の共生のリーダーたちの実践から抽出 (抽象) した、という意味で、私はこれを「共生の哲学」と呼ぶことができる、と考える。

以下、「共生の哲学」の基本概念を図示した菱形について、信徒発見150年 (1865~2015年) の長崎の歴史をも念頭において、できるだけ簡潔な説明を試みる。

a 希望 (L'Espérance)

今年2015年3月17日、国宝「大浦天主堂」で信徒発見150年のミサが荘厳に執り行われた。私も歴史の中で神の御業「驚くべきこと」(ʾʾʾʾ, pele') に立ち会いたい思いでミサに出席した。この大浦天主堂は正式には「日本二十六殉教者記念聖堂」(L'Église des Vingt-six Martyrs Japonais) という。1597年、長崎、西坂の丘で殉教した二十六名の殉教者が、1862年6月8日、ローマ法王ピオ九世から列聖されたのを記念して、殉教の聖地・西坂に向けて建てられたのが大浦天主堂である。

天主堂の建設にたずさわったフュレー神父 (Louis-Théodore Furet, 1816~1900) は、開国後の長崎の現実に接して、近世日本における厳しい切支丹の弾圧と迫害によって、もはや日本にキリスト信者は一人もいないと失望して、故国フランスに帰国する。それに対して、協働者プチジャン神父 (Bernard-Thadée Petitjean, 1829~1884) は、いまだ禁教令下の長崎であっても、必ず「潜伏きりしたん」を見出すことができるという「希望」を持ち続けて、きりしたん信徒の発見に情熱を傾けた。

信徒発見は、1865年3月17日、大浦の外国人居留地に建つ「フランス寺」、すなわち、大浦天主堂に浦上のきりしたん十数名が訪ね来たって、そのうちの一人の婦人、イザベリナゆり（杉本姓、旧姓溝口）がプチジャン神父に「われらの胸、あなたの胸とおなじ」（Notre Coeur à nous qui sommes ici, est le même que le vôtre.）と告白して実現した^{7,8)}。こうして、「希望」は信徒発見の欠くべからざる要因であった。まさにそのように、希望は出会いと共生の不可欠の契機でもある。

b 愛 (L'Amour)

17世紀のはじめに、ポルトガルの宣教師たちによって、キリスト教の宣教のために編集された『日葡辞書—ポルトガル語の説明を附したる日本語辞書』（*Vocabulario da Lingoa de Japam com a Declaração em Portugues*. Nangasaqui, 1603）では、“Taixet”（タイセツ、大切）という日本語の辞書項目に“Amor”（愛）というポルトガル語（ラテン語も同じ）が充てられていた。そうして、「大切に燃ゆる」、「大切に尽くす」、「大切に存ずる、または、思ふ」などの例文が添えられている。

『日葡辞書』では、この“Taixet”（大切）＝“Amor”（愛）は、“Coi”（恋）と“Renbo”（恋慕）とに鋭く対比して理解されていた。すなわち、“Coi”（恋）は「愛情、またはよこしまな慕情を抱く」と訳され、“Renbo”（恋慕）は「恋ひ慕ふ」、すなわち「みだらな、あるいは肉欲の情（volúpia）から人を愛する」と訳されていたことと鋭い対比をなしている。

翻って、現代キリスト教の愛の理論では、「アガペー（ἀγάπη）とエロース（ἐρως）」を峻別する。人類の歴史と共に古いエロースは、人やものの価値、例えば美しいゆえに愛する愛である。真なるもの（真理）を愛する哲学者の愛は、それゆえに「プラトンの愛」（Platonic love）と呼ばれる。それに対して、アガペーは対象の持つ価値にかかわらず注がれる愛である。アガペーは、愛される側の価値にかかわらず、愛する側の主体的な（もっと言えば主権的な）愛に発する、自発的な愛である。

『日葡辞書』は「恋」、「恋慕」、「大切」という当時の日本の民衆の使う俗語を、キリスト教宣教の立場から、20世紀の「アガペーとエロース」の対比に劣らず、ものの見事に識別し峻別したといえる。

c 非暴力 (Ahimsa, ou la non-violence)

非暴力とは、平手と拳骨、そして腕力、すなわち武力（arms）の使用を控えることを意味する。

私はここで聴衆（読者）各位に一つの問いかけをしたい。この「小児保健協会」の学術集会初日に技能講習会やスキルアップのための研修会が開かれた。ところで、保健と医療に関わる知識と技術の習得は、この「共生の哲学」菱形図とどう関わるか、四項目のおのおのどう関わるか、という問いである。

私自身は「非暴力」を徹底するためにこそ、医療と保健のより深い知識とすぐれた技術の修得が必要になる、と考えるものである。

そして、暴力から解放された手足を「愛」のために使う。長崎ルーテル教会の牧師、岡 正治（おか・まさはる、1918～1994）は、《愛は出掛けてゆくもの》と言った。この「菱形図」の読み解きに示唆するところは小さくない。

d ほゝえみ (Le sourire)

ここで言う「ほゝえみ」は商業的な、顧客を呼び入れるための、あるいは自分に利益をもたらすための功利的な打算の上に立った微笑ではもちろんない。また、いつもニコニコ、にこやかにしていることでもない。それは共生への希望と愛と非暴力の三方面から押し出される「おもざし」（le visage）としての「ほゝえみ」である。ここで言う「ほゝえみ」は、自他の置かれたきびしい状況に打ち負かされることなく、むしろ、この「ほゝえみ」を通じて、希望、愛、そして非暴力をもって、いっそう確かに人と状況に関わって行く。ここでの「ほゝえみ」はそのような微妙な、しかし大切な働きをするものだ、と言ってみたい⁹⁾。

VI. 結び—「秋月方式」ほか

本稿の結びとして、私は三つのことを書き記しておきたい。

一つは、家庭生活の大切さと関連して、秋月辰一郎の提起する「秋月方式」について、である。

秋月辰一郎（1916～2005）は京都帝国大学医学部を卒業して、長崎に戻り、長崎医科大学物理的療法科長・永井 隆のもとで放射線医学を学んだ。秋月は永井 隆の最初の弟子であった。秋月は、浦上第一病院（現在、聖フランシスコ病院）の若き医長として、長崎医大附属病院の永井 隆助教授とは目と鼻の先で、1945年8

月9日を迎えた。

そうして、秋月医師は、あの日、あの時から一日の休みもなく、原爆の被災者、被爆者の救援と治療に奔走した。秋月は医師という「職業を通じて」被爆者の医療に尽くしてきたのである。しかし同時に、秋月は「職業を越えて」という重要な問題提起をもしていた。なぜなら、問題と課題は職業の中だけでなく、職業を越えた広大な領域にも存在するからである。暴力、とりわけ「核暴力」¹⁰⁾ (nuclear violences) — 3・11後の世界では、核兵器と核戦争のみならず、原発／原子力発電も「核暴力」に含まれる一に対しては「職業を通じて」のみならず、「職業を越えて」の関わりが必要であることを、秋月は生涯を通して訴えた。これを私は「秋月方式」と呼ぶのである。

秋月医師は、IPPNW（核戦争防止国際医師の会）の長崎支部長として、支部の例会に出席して、その帰りに「ぜんそく」の発作を起して倒れた。秋月辰一郎はその生き方とその生涯のすべてをもって「職業を通じて」と同時に「職業を越えて」核暴力に抗った、と言える。

今一つ、座長（松本 正医師、みさかえの園むつみの家）から私に提出された大切な問いかけがある。それは共生する根拠は何か、という問いかけである。

これについて、答えは日本と世界の共生の実践例の中にすでに明示されている、と私は考える。「共生の根拠とは何か」と問われるなら、それは「人間と市民の権利宣言」（いわゆる「フランス人権宣言」1789年）および「世界人権宣言」（国連総会、1948年）に謳う、すべての人間の「自由」（liberté）と権利における「平等」（égalité）、そしてすべての人間の「固有の尊厳」（the inherent dignity）という概念は、20世紀の二つの世界戦争を経て、ナチズムによる強制収容所とユダヤ人に対するホロコースト（大量殺戮）、南京大屠殺、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下などを想起する中で、人類史上初めて「世界人権宣言」（Universal Declaration of Human Rights, 1948）の中に盛り込まれ、新ミレニアムを迎えるにあたって「国連ミレニアム宣言」（2000年）の中でも第一に言及された極めて重要な「価値と原則」である。譲り渡すことのできない（inalienable, 不可譲の）自由と平等、そして固有の尊厳が侵される時、私たちは共に生き、共に戦う「共生」によって、これらの本源的な権利と尊厳とを回復

しようとする。本稿で言及した共生の実践とその範例はすべて、それぞれの歴史的な脈において、力点の差異はあっても、これら共生の根拠を明確に指し示している、と言えよう。

最後に、もう一言つけ加えたい。私は「共生の哲学」について、希望はますます高く、愛＝大切はますます深く、非暴力をあらゆる局面において徹底させる、しかも、「ほゝえみ」をもって！と提起した。私の提案する、宝石の切片をもって示した菱形図を、とくに若い世代の方々には、各自の医療と保健の実際の営みの中でぜひ「検証」していただきたい、と願っている。

注

- 1) 「ドキュメント 生命大躍進 ①目誕生の謎」NHK総合テレビ。2015年5月10日放映。
- 2) 川本 隆。共生から。岩波書店、哲学塾、2008：16。
- 3) 神谷美恵子。神谷美恵子の世界、みすず書房、2004：90-91；172-173。
- 4) 神谷美恵子。ケアへのまなざし。みすず書房、2013。
- 5) 青木 悦。「人間」をさがす旅—横浜の「浮浪者」と少年たち。民衆社、1984。
- 6) 土井忠生、森田 武、長南 実編訳。邦訳 日葡辞書。岩波書店、1980。
- 7) 片岡彌吉。日本キリシタン殉教史。時事通信社、1979：571-573。
- 8) 長崎地方文化史研究所編。プチジャン司教書簡集。純心女子短期大学発行、1986：249。
- 9) 神谷美恵子。生きがいについて（1971）、ケアへのまなざし。みすず書房、2013：26。
- 10) 高橋真司。長崎にあって哲学する・完—3・11後の平和責任。北樹出版、2015（なお、同書第2編は、秋月辰一郎を論じる）。

文献抄録

- ・秋月辰一郎。死の同心円—長崎被爆医師の記録。講談社、1972年；長崎文献社、2010。
- ・Feldman, Christian. *Mother Teresa : Love Stays*. Crossroad Publishing Co., 1998.
- ・Gandhi, M. K. *Non-Violent Resistance (Satyagraha)*. Schocken Books, 1961.
- ・ガンディー、マハトマ。わたしの非暴力2巻。森本達雄訳、みすず書房、1997。
- ・Gibbs, Nancy. (ed.) , *Nelson Mandela : A Hero's Jour-*

- ney. Time Home Entertainment Inc., 2013.
- ・柿木伸之. 共生を哲学する—他者と共に生きるために, ひろしま女性学研究所, 2010.
 - ・King, Martin Luther. *Strength to Love*. Fortress Press, 1981.
 - ・King, Martin Luther. *A Testament of Hope : The Essential Writings and Speeches of Martin Luther King*. Edited by James M. Washington. Harper San Francisco, 1986.
 - ・Lévinas, Emmanuel. *Totalité et Infini : Essai sur L'Étériorité*. Martinus Nijhoff, 1971 ; Kluwer Academic, 1994 ; エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限』熊野純彦訳. 岩波書店, 岩波文庫, 上下2巻, 2005-2006.
 - ・Molla, Segre. *Martin Luther King*, Editions Assouline, 1999.
 - ・Mother Teresa, *Mother Teresa in my own Words*. Compiled by José Luis Gonzáles-Balado. Gramercy Books, 1996.
 - ・Nelson Mandela, *Long Walk to Freedom : The Autobiography of Nelson Mandela*. Little, Brown and Company, 1994, 1995.
 - ・Nygren, Anders. *Agape and Eros : The Christian Idea of Love*. Translated by Philip S. Watson. The University of Chicago Press, 1953, 1982 ; アンダース・ニーグレン『アガペーとエロース』岸 千年, 大内弘助訳. 新教出版社, 3巻. 1954-1963. なお, スウェーデン語の原著は, 以下のとおり。*Den Kristna Kärlekstanken Genom Tiderna. Eros och Agape*. (Stockholm, 1930-1936.)
 - ・大江健三郎. ヒロシマ・ノート. 岩波書店, 岩波新書, 1965.
 - ・大江健三郎. 新しい人よ眼ざめよ. 講談社, 1983 ; 講談社文庫, 1986.
 - ・大江健三郎. 信仰を待たないものの祈り. (1987), 人生の習慣^{ハビット}. 岩波書店, 1992 : 3-36.
 - ・世界遺産推薦記念特別展「聖母が見守った奇跡」展実行委員会編集. 聖母が見守った奇跡—長崎の教会群とキリスト教関連遺産. 長崎歴史文化博物館発行, 2015.